あい、らぶ、ゆー

二葉一葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あい、らぶ、ゆー

【Ｎコード】
Ｎ９３３５Ｆ

【作者名】
二葉一葉

【あらすじ】
告白してきたのは、遠藤。告白したのは、みんなのエンちゃん。みんなのエンちゃんが好きな人は・・・。結ばれる恋が本物の恋？結ばれない恋は、偽りの恋？わかることは、キミが大切だということ。

高校生、夏のはじまり

「エンちゃん、ノート見せてっ！」
「うん、いいよ。」
「あ、エンちゃん、あたしにもっ！」
「うん。」
「お前ら、ずりーよっ。オレにも見せろって！」
「てゆーか、ここ、分からないんだけど、教えて、エンちゃんっ！」
「えっと、どこ？」
「エンちゃんっ！」
「うん。」
「エン様！」
「・・・はい。」

わたしは、伊沢円（いざわまどか）。みんなからエンちゃんって呼ばれます。

「エンちゃん、ここって・・・で、いい？」
「うん。あってる。」
「ほんとっ？よかったぁー」
「じゃ、じゃ、この答えってさー・・・」
「えっと、ここはね・・・」

「伊沢さん。」
「・・・うん？」
「ボクとつきあって欲しいんだ。」

・・・・・・・・・・・・・・え？

「伊沢さんのこと、好きなんだ。」

見上げた先に、遠藤、クン。下の名前は、わからない。確か、バスケ部。
少し長い黒い髪が目に入って邪魔なような気がする。目が大きいから、余計、そう思う。

「えええええ、エンちゃんっ！」
静まり返った教室で、真っ先にわたしを呼んだのは、前に座るカオリちゃんだった。
耳まで真っ赤にして、鼻息が荒くなって、ちょっとビックリした。
ガツッと腕まで掴まれて、カオリちゃんは身を乗り出した。
「どどどどどど、どうするっ！？」
うん、とりあえず、落ちついて、カオリちゃん。
でも落ちつかなきゃいけないのは、カオリちゃんだけじゃなくて。
教室にいた子、みんなが、騒ぎ始めた。

「えええ、遠藤っ！お前、ここここんなとこで、何言ってんだよっ！」
「そうよ遠藤！場所、考えなさいよっ！」
「いや、遠藤、お前はよく言った！」
「よく言った、じゃないわよっ！エンちゃんが困ってるじゃない！」

困ってるけど・・・。この騒ぎに、ね。
「えええええ、エンちゃんが、付合うなら、それでいいけど、でも、あの、嫌なら断るとか、全然ありだよっ！？」
カオリちゃん、落ちついて。
腕をぐわんぐわん揺らされながら、もう一度、遠藤を見上げた。
あ。顔、赤い。

付合う。断る。嫌なら？
つきあって欲しい。というのは、どこに、とかじゃない。
好きなんだ。というのは、告白。
好きだから、わたしとつきあって欲しい。
きっと、これからの毎日を、わたしと。
遠藤、と。

「遠藤、クン。」
ぐわんぐわんと揺れてた腕が、止まった。
みんなの騒ぎも、一瞬で静まった。
キュッと結ばれた遠藤の唇が、綺麗だ。
「わたし、好きな人がいるの。」
とても好きな・・・・

「ななななっ、何、それっ、それ何っ！？聞いたことないっ！！」
「エンちゃん、どういうこと！？」
「好きな人、いたのっ！？」
ぐわんぐわんと、今度は体が揺れ始めた。
カオリちゃんは見た目よりずっと、力があるんだなぁ。
「う、うん。」
揺れながら、かろうじて頷いた。
「誰、それっ！？」
体の揺れが止まると、カオリちゃんの顔がすぐ目の前にあった。
こんなに近くで見ることもなかったけど、カオリちゃんのつけ睫毛、すごく上手。
今度、わたしもやってみようかな。

「エンちゃんの好きな人ってっ！？」
「あっちゃん。」
好きな人名前を言った後の、カオリちゃんの顔は見応えがあった。
目も口も、鼻の穴も、もしかして毛穴までも、開いてたかもしれない。
大丈夫？って、声を掛けようとしたら、カオリちゃんはのけ反ってひっくり返った。
そして。
「ぴぎゃーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！」
そう、生まれて初めて聞いたような声で倒れこんだ。

「あっちゃん、って・・・」
「あの『あっちゃん』？」
「あの・・・？よりにもよって、あの・・・？」
「嘘だ・・・・・」

倒れ込んでピクリともしないカオリちゃんのことを周りは誰も気にならないらしい。
そっと、わたしはカオリちゃんの背中を叩いてみたけど、やっぱり動かない。
困ったなぁ、大丈夫かなぁ。って、見上げれば、みんな何故か頭を抱えてたり、ヒソヒソと何か喋っていて、こっちには気づかない。
だけど、遠藤は、目が合うと、笑ってくれた。
困ったなぁ。って、顔。眉を寄せて、少しだけ唇を突き出して、笑ってた。
「大丈夫。」
遠藤は、そう、言った。
みんなにそれは、届いてなかったけど。
わたしは、頷かないで、笑ってみた。

ガラッ。
開いた扉の音に、みんなの視線が一斉に一方向に動いた。
まだ、授業のチャイムは鳴ってない。

「っはよー。」

いまは、お昼を食べ終えた、お昼休み。
あっちゃんには、いまが朝、らしい。
「・・・オハヨ？何？みんなして。・・・なんかした、オレ？」
何かしたようなヤマシイことでもあるのかな。
額の汗は暑さからくるもじゃなくて、冷や汗かも？
なんて。ありそう、いっぱい。

「い、いやっ！っはよ、アツ！つか”おそよう”じゃねーかっ！」
「なな、なん、何だよ、まーた、彼女んチからの登校かよっ？」
「んー？それがさー、また彼女に振られてー・・・。あ、円、聞いてよ・・・」
「遠藤っ！」

倒れ込んでたカオリちゃんがいきなり飛び起きたわけだから、思わずわたしは引いてしまった。
あっちゃんも、他の子も、驚いたように立ち止まった。
呼ばれた遠藤も、固まったように、動かない。
カオリちゃんはそんなこと、気にしてない。
だから。
「あたしは、何も聞かなかった！みんなも聞いてなでしょ！」
みんなが、カオリちゃんの剣幕に、頷いた。
「あたしは、遠藤を応援するわっ！ゴメンね、エンちゃん！だけど、これがエンちゃんの為だからっ！」

わたしの為？
カオリちゃんはそう言って、最後にわたしの両手を握って上下に振った。

「あ、あ、あたしもっ！あたしも遠藤を応援する！」
「あたしもっ！何も聞いてなかったかも！だから遠藤、頑張れ！」
「あたしも遠藤！」
「よし、オレも遠藤に一票だ！」
「そうだな、遠藤だな！エンちゃんは何も言ってない！」

教室中に、遠藤コールが巻き上がる。
きっとカオリちゃんは日本を動かせる力があるような気がする。
あっちゃんは。
「よくわからんけど、じゃ、オレもエンドー。」
遠藤コールに一緒になって騒いでた。

わたしは。
呆然としてる遠藤とまた目が合ったら、また困ったなぁって笑うのかなって。
少しだけ、見てた。

遠藤は。
わたしを見ることは、なかった。

雨に咲く花

宮路敦史（みやじあつし）。みんなからアツとかあっちゃんとか、呼ばれてる。
ちょっと不真面目だけど、陽気で気さくだから、男女ともにモテている。
男でも惚れ惚れするような完璧なルックス。
彼女がいないことなんて、ない。次から次、彼女なのかそうじゃないのかさえわからない女の子が彼の周りにいつもいる。
だからちょっと下世話な噂も耳にする。
本人も知らないところに子どもが3人いるとか、実は年上の奥さんがいる、とか。
一時、ハリウッドスターとのラブロマンスさえ浮上した。
さすがにありえない。

「でもさ、実際、どうなの。」
「・・・何が。」
「エンちゃんよ！エンちゃん、本当にアツのこと・・・」
「それ以上言わないでっ！」
「でも・・・」
「歩く精子放射人間よっ？ありえない、ありえないっ！」
「・・・だよ、ね。みんなのエンちゃんだもんねっ！」
「そうよ。エンちゃんは、エンちゃんに相応しい男じゃなきゃ！」
「でもさ。」
「何よっ？」
「いやね？あっちゃんがあーゆー男になったのも、エンちゃんが原因っていうのを聞いたことある。」

「・・・何それ。どういうこと？」
「あのあっちゃんがコクって、で、振られたのが、エンちゃんだ、って。しかも、初恋。」
「・・・まさか。」
「・・・ないでしょ、それは。」
「だーよな？好きだって言ってるのは、エンちゃんだし・・・。」
「「言ってないっ！！」」

みんなのエンちゃんと、彼は、小学校からの幼なじみ。

あ、雨。
今日は暖かいから濡れて帰っても平気かな。
なんて、ただ、傘を忘れただけだけど。
うん、よし。
いち、にぃ・・・と屈伸して、走る準備、オッケー。
では・・・
「遠藤、クン。」
カバンをグッと抱え込んで、走り出そうとした足が、止まった。
「傘、あるよ？」
ボクの隣で黄色い傘をがポンッと広がった。
傘の中から、花、花、花。
花の下で、伊沢さんが微笑む。
「一緒に帰ろ。」
栗色の瞳にボクが映ってるのが恥ずかしくて、むず痒かった。

伊沢さんの家をボクは知らない。
ボクの家を伊沢さんが知るはずもない。

「遠藤、ユウ？」
「うん。優勝の優。」
「優秀な優。」
「・・・優良な優。」
「優柔不断、な、優。」
「やだなぁ、それ。」
「優しいの、優。」

伊沢さんの左肩が濡れないように、くっついて歩くことが出来ればいいけど。
ボクは出来るだけ、出来るだけ、傘を左に傾けて、歩いた。
今日が暖かい日で、良かった。

「それじゃ、ここで。」

ボクの家はここを曲がって、また曲がって、横断歩道を渡って・・・
ちょっと距離がある。
「ありがとう。」
傘を渡す。一瞬、手に触れた。
伊沢さんは、傘を下ろして、ツッと、空を見上げた。
ボクも同じように、空を見た。
小さな雨が、落ちてくる。

「遠藤、クン。」
傘を閉じた伊沢さんは、ボクを見てた。
困ったような、顔。
少し口を開けて、言葉を探す。見つけた言葉を飲み込んで、また探す。
見つかるまで、ボクは待つ。
栗色の瞳は、ボクを越えて、ずっと遠くを見てた。

「わたし、あっちゃんが、好きなの。」

伊沢さんは、泣きそうな顔で、笑った。
小さな小さな雨粒が、ボクには痛くて、上手に笑えなかった。
だから「伊沢さん」って、代わりに呼んだ。

「アツも伊沢さんのこと、好きだよ。」

伊沢さんの左肩は、思ってたより、濡れていた。
ボクって傘を差すのが、ヘタクソだ。

「そうかな。」
「うん。」
「そう、かな・・・。」
「そうならいいなって、思うよ。」

きっと、そうだよ。
そう願う。
好きな子の幸せは、願うものだ。って、そう、思うから。

伊沢さんは、花開く。
ボクにそっと差し出した。

「遠藤は、優しいね。」
「だって、優、だから。」

雨は止んだかもしれない。
だけど、今度は上手に差せるといい。
また一瞬、手に触れた。

伊沢さんと目が合って、小さく笑った。
さっきより少しだけ、近づいて、歩く。
曲がらずに、真っ直ぐ歩く。

ボクは今日、伊沢さんが中学の頃にバスケ部だったことを知った。・・・ちょっと意外。
アツは”ケンカ部”、らしい。・・・妙に納得。
ボクがバスケ部部員ということを伊沢さんは、知ってた。嬉しかった。

「あの家。」と、伊沢さんは赤い屋根の家を、指差した。

真夜中のピラフ

雨は、止んでいた。

体は少し、汗ばんでた。
なのに、いつもよりベッドがふかふかしてる。
どこまでも体沈みそう。
ああ、また、眠たくなってきた。
だって遠藤が、気持ち良さそうに寝てるんだもん。
幸せそうな、寝顔。

ピルルルル～・・・

「ん・・・」
遠藤の眉がキュッと寄る。
ジィィィーと見てたわたしの視線では起きなかったのに、機械音には、起きるんだ。
「・・・あ、れ？」
でも、目をこする仕草が可愛いから、許す。

ピルルルル～・・・ピッ。

冷たい携帯。
人類最大の間違い発明、だと思う。
ね、遠藤？

『もしもし？円？』
「うん。」
『いまからさー、そっち行くけど・・・』

「あっ・・・」
遠藤が起き上がって、わたしの体は無情にも冷たい空気にさらされた。
あ、ゴメン。って。遠藤はすぐ気づいて、布団を掛け直す。
その顔がちょっと赤い。
わたしにも、伝染(うつ)った。

『・・・円？誰か、いる？』
携帯は嫌い。
だから、遠藤に渡してしまった。
『おい？円？』
遠藤は、声の主を携帯越しに見つめてた。
・・・服、着ちゃお。
「・・・もしもし。えっと・・・遠藤、です。」
脱ぎ捨てたままの制服。
遠藤のシャツを、たたむ。
みんなも、こんな風に脱ぎ捨てたまま、なのかな？
わかんないや。
カオリちゃんには・・・聞けないね。
「アッ？・・・うん。えっ？あ、そんな時間？え、え、いや、えっと・・・」
午後１１時４８分。
そんな時間、ですね。
「ゴメン、あの、帰るから。えっと・・・、伊沢さん。」
「帰るの？お腹減ってない？ゴハン、作るから食べていって？」
そうは言っても、いまからだとピラフくらいしか作れないけど。
手の中に戻った携帯は不思議と温かかった。
「だけど、遅いから・・・」
「食べてって？・・・あっちゃんも、食べるでしょ？」
『・・・食う。行く。遠藤、帰らせるなよ。』

携帯は一方的に切れた。
いつものこと。
・・・あっちゃん、怒ってる？
ベッドの中、遠藤は困ったように笑ってた。

ウチには、パパとママもいない。
なんて、ちょっと嘘。
パパはいないけど、ママはいつも明け方までいないことが多い。
たまに、いる。

「好きなの？オレより？」

やっぱりあっちゃんは怒ってた。
砂糖５つの甘いあまーいコーヒーをいれてあげたのに、一口も、飲んでない。
遠藤は、砂糖は入れなくてミルクを入れるらしい。
わたしはコーヒー、飲めない。

「あっちゃんのことは、好き。」
「オレも円が好き。」

あっちゃん専用のマグカップは青。わたしは、白。
遠藤のマグカップは、花柄になった。しかも赤。
ホットミルクに砂糖５つ。
ミルクにうっすらと膜が張る。

「わたしたちは、結ばれないよ。結ばれることは、ないよ。」

一生、ない。
死んでもない。
生まれ変わっても・・・たら、わからない。
ただ。
生きている、今。
結ばれてはいけない。
いけないの、だ。

「オレより、エンドーが好きなの？」

あっちゃんは、泣きそうな顔で、怒る。
だから全然、怖くない。
なのに、わたしも泣きそうになる。
どうしてだろう。
どうして結ばれてはいけないのかと同じくらい、不思議。
この不思議が、遠藤には、わかればいいな。

「あっちゃんより好きになる人が、遠藤なの。」

ピラフは辛口で作った。
あっちゃんの好きなマッシュルームは、もちろん入れて。
「エンドーエンって、おかしくね？」
あっちゃんは、食べながら、まだ怒ってる。
何に怒ってるんだか。
わざと辛くしたのがバレたかな。
「マドカ、でしょ。」って、遠藤が言う。
ふっと顔が熱くなったのは、ピラフが辛いから。
「エンドーエン。変な名前だな。茶園みてぇ。」

「・・・かわいいよ。『エンドーエン』。うん、かわいい。」
そして遠藤は、「ふたりは食べ方が似てるね。」って、笑った。
あっちゃんもわたしも、顔を見合わせて、少し笑った。少しだけ、ね。
少しだけだったのは、あっちゃんが泣きそうだったから。
辛ぇんだよ。って、すぐ、拗ねたから。
「それにしてもホント、辛いねぇ。」
遠藤は、泣いてた。
また、わたしは笑った。やっぱり、少しだけ。

遠藤があっちゃんを越える日は、そう、遠くない。

1F

『みんなのエンちゃん』、に、彼氏が出来た。

「やっぱ1番は上原だよな。」
「池下もよくね？」
「あー、いいね、いいねー。」
「なぁ、アツは？3組の小島からも告られたんだろ？」
「マジでっ！？で、振ったの？もったいねー！」
「あっちゃん、モッテモテ～！」
「うひゃひゃっ、うるせぇっ！ひがむなっ！」

中学生、夏の終わり。
『みんなのエンちゃん』は、今より短い髪の毛で、バスケ部なんかに入っちゃって、灼けていた。

「そーいえば、伊沢ってさー、男バスの先輩に告られたらしぃぜ？」
「え？アツ、知ってた？」
「・・・知らね。」
「え、マジで？あれ？」
「伊沢って何気にモテるよなー。あっちゃん仲いいし。な、ショーカイしてよ、オレに。」
「あ、バカッ・・・！」

ヘラヘラとオレの肩に手をおいた友達を、ぶん殴った。
『みんなのエンちゃん』に告ったヤツらを片っ端から、ぶん殴っていた。

・・・当時のオレは、荒れた中学生でした。

『エンちゃん』が、『みんなの』ものになったのは、たぶん、オレのせいだろう。

「また、ケンカしたの？」
ケンカが強いかって言ったら、強いけど、無傷で済むケンカはそうない。
新しい傷に、『エンちゃん』が躊躇うこともなく、触れた。
「・・・ふっかけられたから、買っただけ。」
嘘です。自分から吹っかけてます。いままで、全部。
「買い過ぎだよ、あっちゃんは。」
売り過ぎ、しかも押しつけ過ぎ、なんだけど。
『エンちゃん』は、呆れた顔で笑って、「帰ろ。」って、いつものように言った。
帰る家は、違うのに。

ちっちゃい手。細い腕。
無防備に、笑う。
「あっちゃんと一緒に遊びたいんだって。」
「・・・誰が？」
「もう、聞いてないでしょ？バスケ部の後輩で・・・」

「オレが好きなのは、円だよ。」

ちっちゃい手が、オレの手の中からすり抜けた。
瞬き2回して、オレを見る。
「わたしもあっちゃんが好きだよ。」

「じゃ、両想いだ。付合う？」
「付合えない。兄妹だから。」
キョーダイ。って、オレがにぃちゃんだっけ？あれ？おとーと？
そんなこともわからないキョーダイって、何だよ。・・・笑える。
「一緒に住んだことねぇのに、キョーダイかよ。」
「兄妹だよ。」
「キョーダイじゃねぇよ。」
笑える、のに、笑えない。
出来たばかりの傷がヒリヒリと痛んだ。

「・・・わたしたちは、兄妹だよ。」
掠れた弱い声だった。
円は、泣いていた。

ふたりして鼻をすすって、手を繋ぐ。
「ピラフ、食べてく？」って、不細工な顔はオレだけに見せとけ、と思う。
「食う。チャーハンだろ、いつもの。」
「・・・ピラフ。」

失恋したふたりを、死にかけの蝉が、笑った。

ずっと、一生、仲のいいキョーダイでいる。
月のない夜に、星に誓ってみた。
守れるかどうかは、別。
とりあえずシスコン。
彼氏なんかできた日には、彼氏をぶっ飛ばしてやる。
結婚とかいった日には「どこぞの馬の骨に～」ってちゃぶ台ひっくり返してやる。

でもやっぱり許しちゃって・・・泣くな。絶対、泣く。
終いには、昔の超有名映画のアレ、結婚式の最中に乗り込んで連れ出すヤツ、を、やってやる。

・・・それでも。
好きなオンナの幸せを願う、オトコになりたい。
だから、なぁ？
エンドーエン。って、茶園みたいな名前で幸せになれるのかよ？

「パパは元気？」
「元気も何も1回ぶっ倒れりゃいいんだよ。」
「・・・何かあった？」
「新しいカノジョ、出来たらしいぜ？かぁちゃん怒りまくり。」
「・・・弟か妹、出来るかも。」
「・・・笑えねぇ。」

ちっちゃな手からオレに、幸せを手渡されるのは、まだまだずっと、先の話。

｜Ｆｌ（後書き）

ありがとうございました

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9335f/

あい、らぶ、ゆー

2010年12月5日11時25分発行